

『季刊三千里』と韓国民主化*

—日本人に知らせる—

朴正義**

(e-mail: kannan322@hotmail.com)

目次

1. はじめに
 2. 象徴としての金芝河
 3. 韓国民主化への取り組み
 4. 光州民主化抗争と金大中
 5. おわりに
-

1. はじめに

雑誌『季刊三千里』¹⁾は、その創刊号において軍法会議で死刑宣告を受けた「金芝河」を特集をするなど、一貫して韓国の民主化闘争に強い関心を示した。この時、『季刊三千里』は韓国の民主化闘争に対してどのような役割を果たしたのであろうか。

論を進める前に確かめておかなければならないのは、『季刊三千里』がどの立場から韓国の民主化闘争を語ったかである。拙著「『季刊三千里』の立場(1)―総連との決別―」²⁾「『季刊三千里』の立場(2)―金日成主義批判による北韓との決別―」³⁾にお

* 이 논문은 2012년도 원광대학교 교내연구비로 연구함.

** 圓光大學校 日語教育學科 教授 日本學

1) 『季刊三千里』とは、過去において日本で、組織の機関紙でなく、純粹に民間の在日によって創刊された一般雑誌。1975年2月創刊、13年間続き、1987年5月巻50号で終刊。編集委員の姜在彦、金達寿、金石範、李進熙、そして若き日の姜尚中氏などなど、当時の在日を代表する知識人を総動員する形で執筆が行われ、さらに、当時の日本の著名な知識人、司馬遼太郎、上田正昭、大江健三郎、などなど挙げれば限がなく、多くの日本人に韓半島を語らせている。日本人に、韓半島を考えさせ、在日問題だけでなく韓半島統一をも自らの問題として捉えさせた功績は大で、そして、当時、日本の多くの大学において副教材としても採用された。

2) 朴正義「『季刊三千里』の立場(1)―総連との決別―」『日本文化学報』48輯 韓国日本文化学会 2011

いて、『季刊三千里』の立場が、金日成主義批判を通して反総連を超えた反北韓であったことを、既に明らかにしたところである。即ち、『季刊三千里』が韓国民主化闘争に対し、北の立場からものを言っているのではないことを、最初に断っておきたい。

当時、日本における韓国民主化闘争との連帯は、在日韓国人・朝鮮人(以下、在日と略す)主導でなく日本人主導であった。これは、当時の日本での韓国民主化闘争への連帯を示す二大組織であった「金芝河を助ける会」「金大中救出日本連絡会議」の中心メンバーが、桑原武夫氏⁴⁾・大江健三郎⁵⁾・和田春樹⁶⁾・飯沼二郎⁷⁾、梶村秀樹⁸⁾、鶴見俊輔氏⁹⁾、市川房枝¹⁰⁾、菅直人¹¹⁾、日高六郎¹²⁾氏など各界を代表する日本の著名人で占められていたことをみても明らかである。また、これらの運動は日本で始まったのではな

年2月 p.p.259~279

- 3) 朴正義「『季刊三千里』の立場(2)―金日成主義批判による北韓との決別―」『日本文化学報』50輯 韓国日本文化学会 2011年8月 p.p.291~309
- 4) (1904―1988) フランス文学者、文芸批評家。第三高等学校から京都帝国大学仏文科に学び、フランスに留学。東北大、京大においてフランス文学を講じ、京大人文科学研究所所長を務めた。77年芸術院会員、87年文化勲章受章。
- 5) ノーベル文学賞受賞者。民主主義の支持者として社会参加の意識が強く、国内外における問題や事件への発言を積極的に行った。韓国問題に関しては、過去に「金大中問題」、現在は「従軍慰安問題」に取り組んでいる。
- 6) 東京大学名誉教授。市民運動的な活動でも知られる。2010年に韓国の全南大学から「第4回後裔金大中学術賞」を授けられた。在日韓国・朝鮮人に対する社会処遇の向上や、積極的な戦後補償を行うことについて、一貫してそれを求めた。朝鮮人従軍慰安婦問題については、当時の日本政府に対して一貫して批判的であった。竹島問題について和田は、「竹島が日本の領土と宣言されたのは1905年だ。その時から敗戦までの40年間、竹島は確かに日本の領土だった。1945年に日本の管轄から脱した後、サンフランシスコ条約でも明確な処理がなされなかった」とし、そのうえで、「植民地支配反省の表現として、日本は独島を韓国領土として認める」という独自の主張を展開した。「日韓併合無効論」を主張し、2010年に日本が韓国を併合するに当たっての「韓国併合ニ関スル条約」は当初から無効であったとして、日本政府がその無効性を認めるよう求める声明を発表した。
- 7) 京都大学名誉教授。京都べ平連(ベトナムに平和を市民連合)代表をつとめた。「金芝河を助ける会」「金大中救出日本連絡会議」の、京都の中心的人物であった。また、京大退官後も、「原爆の凶」展の開催を主宰、さらに君が代訴訟の原告団長として活動。
- 8) 東京大学東洋文化研究所助手。神奈川大学助教授、1979年同教授。53歳で死去。戦前の日本における朝鮮史研究の基調をなす停滞史観に反発し、前近代朝鮮がもっていた自律的、内在的な発展の可能性を植民地化がふしだと考え、李朝時代より植民地時代にかけての小規模商工業を分析して、「資本主義萌芽論」を展開した。金芝河支援運動、金嬉老支援運動、指紋押捺拒否運動など、在日韓国・朝鮮人を支援する運動に積極的に参加した。
- 9) 1949年京都大学人文科学研究所助教授。1954年東京工業大学助教授。1960年日米安保条約決議に抗議し東京工業大学教授退官。1961年同志社大学文学部社会学科教授。その後、評論家として活躍。
- 10) 戦前と戦後にわたって、日本の婦人参政権運動(婦人運動)を主導した市民運動家。組織に頼らず個人的な支援者が手弁当で選挙運動を行う選挙スタイルを生涯変えず、「理想選挙」とまで言われた。1980年の第12回参議院議員通常選挙では、87歳の高齢にもかかわらず全国区でトップ当選を果たした。
- 11) 当時、市川房枝の元で市民運動を行う。第94代内閣総理大臣。
- 12) 東京大学新聞研究所助教授、1953年文学部社会学科に転属、1960年新聞研究所教授に再転属。非共産党系陣営のリーダーの一人として60年安保反対運動などを指導し、1968年の金嬉老事件では、在日コリアン差別によって生じた犯罪として犯人の金嬉老を擁護。

い。例えば、「金芝河を助ける会」がどのように始まったか、『季刊三千里』創刊号での鶴見氏と金達寿氏との対談「激動が生み出すもの」において、金芝河が裁判にかけられ死刑判決が出される直前の緊迫した状況下で、海外から日本の著名人への呼び掛けによって組織されたことが語られている。13)つまり、世界的な規模の運動であったため、日本での運動の受け皿としては当然日本人が中心となるしかなかった。さらに、個々に行なわれていた「在日韓国人政治犯」に対する救命運動が、1976年6月20日に「在日韓国人政治犯を支援する会全国会議」と正式に連絡会議が発足した時も、その主導的役割もやはり日本人であった14)。

当時在日は、在日本大韓民国居留民団(現在、在日本大韓国民団。以下、民団と略す)と在日本朝鮮人総連合会(以下、総連と略す)の二つの勢力にはっきりと分かれ、在日の組織はそのいずれかに属していた。共にそれぞれの祖国に無条件忠誠を誓い、祖国の指令のもとに活動を展開していたといえる。総連はその創立理念に「日本での内政不干渉」15)16)があり、日本での韓国民主化運動との連帯は日本国内での政治運動で内政干渉にあたると規定し、これらの運動への関わりには消極的であった。これは、「在日韓国人政治犯」に対しても同じであった。彼らにとっての関心事は、ただひたすら祖国である北の建設に在日を駆り立てることだけであった。さらに、当時朴政権に忠誠を誓っていた民団17)にとって、韓国の民主化勢力は敵性勢力でしかなかった。

ただ例外として、韓国民主回復統一促進国民会議(韓民統)18)、韓国青年同盟(韓

13) 鶴見俊輔・金達寿「激動がうみだすもの」(『季刊三千里』創刊号 三千里社 1975年2月 p.13)

14) 吉末繁「在日韓国人'政治犯'の救援を」(『季刊三千里』八号 三千里社 1976年11月 p.134)

15) 朝鮮総連は結成以降、「日本革命」には関与せず、日本の内政問題にふれないとの活動方針を明示した。この「内政干渉はせず」という主張は、日本革命への参加か、朝鮮革命に専念するか、という二つの国のどちらの社会主義革命かの主張にすぎず、民主主義や人権、市民権思想に立脚した主張とはその発する源が違っていた。即ち、朝鮮労働党の党利党略に組み込まれた主張で、北朝鮮の路線に追随する道を歩むことになり、在日社会に大きな禍根を残すことになった。(金賛汀『韓国併合と「在日」』新潮社 2010年 p.p.198~199)

16) 1955年に総連が結成した後、直接組織が攻撃されたり、北が批判されない限り、それに対する政治的行動を自粛した。このため、在日の人権問題に対して表にでることはなかった。「指紋押捺」「就職差別」、ましてや「在日韓国人政治犯」問題にいったい関係しないばかりか、むしろ日本政府の立場にたった。(朴斗鎮『朝鮮総連―その虚像と実像』中央公論社 2008年 p.p.39~41, p.p.51~53)

17) 民団は60年の四・一九革命による李承晩政権の崩壊直後の5月、「民団第三次宣言」を採択し、本国政府の政策に対しては、在日同胞の権益を守るという立場からは々々非々の姿勢で望むことを明らかにした。しかし、5・16クーデターによる朴正熙軍事政権の出現で状況は再び変わり、日帝時代の親日分子として有名な権逸が中央団長に就任し、民団への朴政権の干渉が始まり、駐日代表部(韓国国交正常化前の大使館の前身)を通して民団を御用化した。73年8月日本での「金大中拉致事件」後、金大中のアメリカや日本での行動を反国家活動と批判し、東京・大阪で「金大中一派糾弾民衆大会」まで開いた。(宮田浩人『65万人―在日朝鮮人―』すずさわ書店 1977年 p.p.293~298)

18) 1973年に「韓国民主回復統一促進国民会議(韓民統)」として発足し、1989年の組織改編により在日韓国民民主統一連合(韓統連)となった。民団の元団員を中心メンバーとし、発足前の準備段階から金大中の民主化運動と韓国反政府運動を支持・援助していた。韓国政府からは1978年に国家保安法における「反国家団体」に指定されて以来、関係者は韓国への帰国を認められなかった。(宮田浩人『65万人―在日朝鮮人―』すずさ

青)19)、韓国学生同盟(韓学同)20)が、在日の立場から韓国の民主化へ組織をあげて取り組んだ。しかし、その資金面・組織の弱さ、民団・本国韓国からの弾圧、さらに日本の公安からの監視・いやがらせなどから、その勢力は大きな力を持てず在日を主導するに至らなかった。このような状況下において在日が韓国民主化闘争に対して出来ることは、組織を離れ日本人主体の運動へ連帯し、韓国民主化闘争を広く日本人大衆に知らすことであった。

本論は、当時の韓国民主化闘争の理念やその思想を深く追求するものではないことを、ここで断っておきたい。本論の目的は、『季刊三千里』が、いかに日本人に韓国の民主化闘争を語らせそれを通して日本人一般大衆に韓国の民主化闘争を知らしめ考えさせたか、即ち、いかに組織を離れた在日の立場から日本において韓国民主化闘争に貢献したかを明らかにすることである。このため、『季刊三千里』全50号に記載された代表的な記事、特に日本において韓国民主化の象徴として登場した金芝河・金大中の記事を中心に検証を試みた。

また、日本人がどのような立場から語ったのか明確にするため、それぞれに注をつけ簡単に韓国民主化・在日問題との関わりを書き留めた。さらに、韓国人には常識と思われるものにも、日本人の理解を深めるため注をつけた。

2. 象徴としての金芝河

金芝河の作品は、「金芝河を助ける会」が組織され活発に救命運動が繰り広げられる以前から、『長い暗闇の彼方に』(中央公論社、1971)『五族黄土蜚語』(青木書

わ書店 1977年 pp.298~303) 2003年に団体構成員の一時帰国が認められてからは、構成員の韓国帰国が可能となった。しかし、現在も韓国政府は「韓統連は反国家団体」との立場を堅持し、訪韓幹部への出頭要請や、訪韓を計画する会員にも取り調べを通告。

19) 4・19革命の歓声は在日韓国人青年に強烈な衝撃と感動を与え、そのような中で迎えた1960年10月9日、李承晩政権の御用団体として結成された大韓青年団を改編し、韓青(韓国青年同盟)が結成された。1973年8月13日、民団自主守護委員会(自主委-旧有懇)、民団東京・婦人会など民団内民主諸勢力とともに、韓国民主回復統一促進国民会議日本本部(韓民統)の結成に参加し、反独裁民主化闘争を本格的に展開するにいたった。韓民統結成直前に引き起こされた金大中拉致事件糾弾・真相究明・現状回復要求闘争、民青学連決起連帯闘争、金芝河の『チノギ』『苦行』の全国上演運動、民主救国宣言支持100万名署名運動、韓国労働運動連帯闘争、政治犯救援運動など、70年代をつらぬいて全分野において闘われてきた反独裁民主化闘争は数えきれない。

20) 韓学同(韓国学生同盟)は、韓半島の南北対立が在日社会に大きく反映されるなかで、大韓民国を支持する学生らによって1950年に結成された。その後、韓学同は1960年の韓国における「4月学生革命」を契機に、真に祖国と民族の問題を考え、その歴史を前進させていこうとする民族的・民主的団体に変革された。そして、「4月革命」後に起きた軍事クーデターに対し「反軍部クーデター声明」を発表、自主的・民主的・民族的組織としての第一歩を踏み出した。以降、在日コリアンの抱える様々な問題解決に向けて、60年代には在日コリアンの権益擁護運動、70年代には維新独裁政権反対運動を中心に運動を展開した。1972年7月7日、民団は第20回定期中央大会で韓学同を傘下団体から認定取り消した。

店、1972)などが日本でも翻訳出版されていた。しかし、救命運動の中心人物だった鶴見俊輔氏が、『季刊三千里』での金寿達との対談において、「私は金芝河さんについてはほとんど何も知らなかった」²¹⁾と述べ。さらに、「中央公論から出ている金芝河作品集を担当の中井毬栄さんからもらって読んだんです、読んで東京に置いていったんです。一方の真継氏にいたっては、飛行機の中で読んでいた」²²⁾と、小田実²³⁾が提案した「訪韓市民連合」の第一次²⁴⁾に参加しソウルに行く直前にはじめて金芝河の作品を読んだ、また同行した真継伸彦²⁵⁾氏はソウルに行く飛行機の中で読んだ、と告白している。「金芝河を助ける会」の中心メンバーがこのような状態であったことからみても、この時点では金芝河は日本ではまだほとんど知られていなかったといえる。

金芝河が日本で本格的に知られるようになるのは、金芝河の救命運動が始まってからのことで、その後『金芝河詩集』(青木書店、1974)、『民衆の声』(サイマル出版会、1974)、『不帰』(中央公論社、1975)、『良心宣言』(大月書店、1975)、『わが魂を解き放せ』(大月書店、1975)、『深夜』(土曜美術社、1976)、『獄中から』(大月書店、1977)、『苦行 獄中におけるわが闘い』(中央公論社、1978)など多くのものが出版され、日本人一般大衆に広く知られるようになった。

ここで、最初に押さえておかなければならないのは、『季刊三千里』は詩人としての金芝河を救命しようとしたのか、それとも民主闘士としての金芝河を助けようとしたのかである。確かに、金芝河の作品として「苦行…1974」(『季刊三千里』2号)など載せているが、その内容は、独裁政権の中で拷問によって有罪にされていく自分を含めた人々を、民衆の一人として怒りと希望をもって語り続けたものである。つまり、作品に著わされているのは、独裁に対し民主化を求める民衆の代弁者としての金芝河である。勿論、金芝河救命運動に参加した者たちは、その後金芝河の作品を読み感動し、詩人としての金芝河をも尊敬したが²⁶⁾、しかし、当時の日本での金芝河の評価は、在日詩人の金時鐘氏が『季刊三千里』において、

私が金芝河に打たれ、あるいは考えさせられている最も大きいことは、彼の持つ大衆観です。それに依拠して、社会的現実にたいする「詩精神の指導的機能」を彼はずっと説い

21) 鶴見俊輔・金達寿「激動がうみだすもの」(『季刊三千里』創刊号 三千里社 1975年2月 p.13)「

22) 『季刊三千里』創刊号 三千里社 1975年2月 p.16

23) 東京大学文学部卒業。本来小説家であるが、市民運動家として世界的に有名。特にベ平連(ベトナムに平和を市民連合)は有名。しかし、あまりにも北韓よりのために、『季刊三千里』は距離を置いた。

24) 最初は、京都大学教授の桑原武夫を団長として30人の人間が参加する予定であったが、ビザが降りず結局は鶴見俊輔・真継伸彦と学生の三人だけで訪韓した。この時、金浦空港でサルトルなどの世界から集められた署名原簿や手紙などは全て没収された。

25) 元独協大学教授。日本の作家。『親鸞』など、信仰の問題を追求した作品が多い。宗教小説以外の代表作としては、スターリン批判とハンガリー動乱に揺れるある大学の共産党細胞の苦悩を描いた『光る声』。

26) 上掲書 p.p.12~31

ている訳ですが、金芝河の民衆に対する信頼、執着のほどは、神憑りのとさえ言っているほどの揺るぎない愛に溢れております。27)……最後に、死なない金芝河の、もう一つの言葉を聞いてください。「わたしのなかに火が燃え、その火が真っ青に燃えている限り、わたしはどんな病気にも、どんな銃剣によっても消滅することはない。平和や慈悲によってでなく、増悪によって執念によって発火する人間、私はそういう人間だ」。28)

と述べているように、民主化運動の闘志としての金芝河であった。

さらに、鶴見俊輔氏が、

金芝河はひとりの象徴だ。金芝河を助けろという運動は、金芝河個人が立派な詩を書いているからあの人だけは救ってくれという運動ではない。彼は根のある詩人なんです。金芝河を助けろというのは一つの運動、一つの民衆の姿勢、そのように圧政にめげずにたたかって行こうとしている民衆の姿勢を助けよ、とすることなんです。29)

と『季刊三千里』で語っているように、詩人金芝河つまり個人としての金芝河でなく、韓国民主化闘争の象徴としての金芝河であった。つまり、日本では金芝河を通して、広く韓国民主化闘争を日本人に知らせようとした。この目的で、『季刊三千里』は韓国民主化闘争の象徴として創刊号に金芝河の特集を組んだといえる。

『季刊三千里』は、創刊号後も、「勇氣ある人々」(布施茂芳『季刊三千里』2号)、「金芝河の呼びかけ」(前田康博『季刊三千里』3号)、「金地下のこと」(中井毬栄『季刊三千里』10号)、「未完の旅路一金芝河とロータス賞」(針生一郎『季刊三千里』11号)、「金芝河にとっての民衆」(中井毬栄『季刊三千里』15号)、「金芝河に関するノオト」(円谷真護『季刊三千里』17号)など、次々と日本人をして韓国民主化闘争の象徴としての金芝河を語らせている。

その中で、当時毎日新聞特派員の前田康博氏は、

朝鮮民族の魂をうたい続けている金芝河の身に再び「死刑判決」の影が忍び寄っている。詩人に死を科すという近代世界ではあまり例のないことが一度ならず二度も起きようとしている。30)

と、緊迫した当時の状況を日本社会に知らせている。そして、彼は、

27) 金時鐘『「在日」のはざままで』 平凡社 2006年(2001年) p.128

28) 上掲書 p.184

29) 鶴見俊輔・金達寿「激動がうみだすもの」(『季刊三千里』創刊号 三千里社 1975年2月 p.18)

30) 前田康博「金芝河の呼びかけ」(『季刊三千里』3号 三千里社 175年8月 p.113)

金芝河を再三に渡って襲い続ける「受難」を日々の報道を通じて、自由に、克明に知る機会を持っているはずだが、大方の日本人は、ここにいたって「遠い国の出来事」「本当とは思えない話」として見過ごしている。……金芝河の「反日」とは本質的に日本のあり方、日本人の生き方をただせ、ということにつきる。……「日韓連帯」が両国民の口のにぼってから久しい。しかし「真の連帯」の意味を日本人にとい続けてきた人は韓国の民主人士といわれる人たちの中にも数少ない。その数少ない一人が金芝河である。……³¹⁾

と、金芝河の救命運動を通して、韓国民主化闘争を単に日本人大衆に知らせるだけでなく、日本人の問題としてそれを捉えた。

さらに、1974年6月29日、モスクワで開かれたA・A作家同盟の常設会議で、金芝河に「特別ロースター賞」が贈られることが決まったことに対し、

政治権力の抑圧に抵抗する詩人の魂がついにアジア・アフリカ各国の作家たちを揺り動かしたのだ。³²⁾

と、金芝河を韓国だけでなく世界における民主化闘争の象徴とまで描いた。

また、『季刊三千里』は、「金芝河『良心宣言』を読んで」（金石範『季刊三千里』4号）、「金芝河の思想を考える」（姜在彦『季刊三千里』10号）、「光は獄中から・金芝河の思想」（金学鉉『季刊三千里』19号）などで、在日に金芝河の思想を追求させた。

当時、「私は共産主義である」という金芝河の「自筆陳述書」がKCIAによって発表され、それが日本の新聞にそのまま掲載された。これを踏まえ1974年4月13日に東京信濃の真生会館において、日韓連帯会議の呼び掛けで、人民革命党³³⁾および金芝河が討議された。この時、「自筆陳述書」の文体が金芝河の文体でないという見解もあったが、この「自筆陳述書」を根拠として「金芝河は共産主義者だ」が体勢を占めた。これでは、彼の民主化闘争が共産主義革命で、ひいては韓国民主化闘争は北韓に同調する共産主義革命と言うことになる。そして、反共法を有する韓国において民主化闘争弾圧は

31) 上掲書 p.113~114

32) 上掲書 p.119

33) 人民革命党事件は、朴正熙政権下において、韓国中央情報部（KCIA）が社会主義性向のある個人を告訴した訴訟事件。被告は、1965年の第一次事件では反共法で、1975年の第二次事件では国家保安法によって告訴された。1975年4月9日に韓国大法院（最高裁）は被告8人に死刑を宣告し、判決から18時間後に刑を執行した。これは、司法による殺人事件であり、これらの事件は朴正熙時代の韓国における人権抑圧の事例として知られている。2005年12月、韓国国家情報院は人民革命党事件がKCIAによる捏造であったと発表した。これを受け、韓国司法当局は人民革命党事件に対する再審査を開始、2007年1月23日に死刑がすでに執行された8名全員に無罪の判決を言い渡した。

法的に正当なものとなり、それに対する反発は内政干渉と言うことになる。まさに独裁政権の民主化闘争弾圧の理論をそのまま認めるものであった。

しかし、その後、韓国から追放された米国神父シンノット氏によって国外に持ち出された金芝河の「獄中メッセージ」つまり「良心宣言」³⁴⁾が5月27日東京で発表された。これによって「自筆陳述書」が拷問による強制的なものであることが明らかになり、金芝河が共産主義者でないことが日本で理解され、金芝河救命運動は勢いを取り戻した。³⁵⁾

さらに、姜在彦氏は『季刊三千里』において、

言うまでもなく金芝河は韓国の民主化運動の旗手の一人として、とりわけその不屈の魂のシンボルとしてある。しかし、私は詩人としての金芝河、キリスト教者としての金芝河を語る力をもたない。……ここでの金芝河の思想とは、彼の生まれた地韓国で蔑まれた地、彼が我が「詩の母」とよんだ木浦の民衆に根差したものであり、彼の諸活動の帰着するところは、分断された祖国統一への志向にある。「国民民主革命」による民主主義の実現、それを基礎とする統一の実現である。³⁶⁾

と、「『国民民主革命』による民主主義の実現、それを基礎とする統一の実現である」と捉えていることから、この「国民民主革命」は決してマルクス・レーニン主義的な共産主義革命でないことは明らかであると主張した。

この「国民民主革命」を、金芝河は「良心宣言」の中で、次のように言っている。

私が夢見ている革命は、自由、民主、自主、平和を基礎とする統一祖国の建設を目指すものであるが、本質的にはわれわれ民衆が自らの運命を自らの手で決起しうる保障を闘い取ることを目標とするものである。私が確信をもって支持する革命とは、このような形態の革命である。

またそれは、外来のイデオロギーによってステレオ・タイプ化されたものではなく、我が民族特有の革命伝統を継承発展させたものになるであろう。東学革命と三一運動、そして四月学生革命の伝統は、来るべき革命のあり方を予示してくれるものである。³⁷⁾

34) 韓国から追放された米国神父シンノット氏に託され国外に持ち出された金芝河の「獄中メッセージ」が5月27日東京で発表されたが、その中で金氏は「息つくひまもない脅迫、苦しみにさらされ、強制されるまま書いたにすぎない。共産主義者でないが、耐えられない脅迫を受けた」と明確に述べており、でっち上げの自白のもとに裁判が進められている可能性が高まった。起訴されたときは反共法四条一項違反(7年以下の懲役)だけだったが、その後「反共法違反で有罪判決を受けた者が刑の執行停止中、反共法違反を再び犯した場合、最高刑(死刑)を科すことができる」という同法九条二項(再犯者に対する特別加重)が追加されていた。(前田康博「金芝河の呼びかけ」『季刊三千里』3号 三千里社 1975年8月 p.118)

35) 金石範「金芝河『良心宣言』を読んで」(『季刊三千里』4号 三千里社 1975年 11月 p.p.96~106)

36) 姜在彦「金芝河の思想を考える」(『季刊三千里』10号 三千里社 1977年 5月 p.p.28)

37) 上掲書 p.37

即ち、金芝河が述べた「国民民主革命」は、民族特有の革命伝統としての「東学革命」(1894年)、「三一運動」(1919)、「四月学生革命」(1960)を継承し、そこから教訓を汲み取って発展させた革命であった。これを、姜在彦氏は『季刊三千里』において「従来教会を拠点とする民主化運動が、生産点にたつ労働者の権利闘争と結合する前兆となるなら、韓国における『国民民主革命』は大衆的基盤を獲得する上で画期的なものである」と評価した。³⁸⁾

『季刊三千里』は、金芝河を象徴として日本人に韓国民主化闘争の現状を語らせ、それを日本人自身の問題として捉えさせ、さらに金芝河の思想を解説することによって、韓国民主化闘争の目指すところを日本人に示し、韓国民主化闘争への理解と支援を訴えたのである。

3. 韓国民主化への取り組み

『季刊三千里』は金芝河だけでなく、「冬の時代」(前田康博『季刊三千里』第5号)、「ある韓国人のメッセージ」(真継伸彦『季刊三千里』第7号)、「ソウルの若者たちから」(川久保公夫『季刊三千里』第8号)、「在日韓国人“政治犯”の救援を」(吉松繁『季刊三千里』第8号)、「ソウルで聞いた七・四共同声明」(田中明『季刊三千里』第10号)、「行進する馬鹿たち」(長璋吉『季刊三千里』第10号)、「獄中の徐兄弟とわれわれ」(猪狩章『季刊三千里』第15号)、「ソウル特派員三年」(前田康博『季刊三千里』第18号)、「韓国キリスト者の闘いに学ぶ」(東海林勤『季刊三千里』第22号)、「“観衆”はまだあきらめていない」(藤高明『季刊三千里』第26号)などで、韓国の民主化闘争の当時の状況を、日本人を通して語らせている。

布施茂芳氏は、朝日新聞外報部記者の目から、「人革党の夫人たち」「キリスト教者の決意」「民青学連事件」「再燃した学生デモ」「沈黙を破った東亜日報」など、韓国民衆全般の民主化闘争について語り、さらに、政治家の動き、野党による民主回復国民会議の結成、金大中と金泳三との共闘宣言などを伝えた。³⁹⁾

前田康博氏は、毎日新聞外部記者の目から、「言論守護実践宣言」をした東亜日報が大手企業の広告一斉解約によって内部分裂を起し、民主記者たちが会社を追い出されたこと、金大中に「選挙違反」の有罪が確定し出国不可能とともに政治活動も禁止され国民から隔離されたことを伝えた。さらに、石油危機による韓国が世界的な高債務国となり、ワシントンの1975年12月8日ワシントンの外交政策研究所が、IMF(国際通貨基金)作成の資料をもとに「近づく韓国経済の危

38) 上掲書 p.p.28~37

39) 布施茂芳「勇気ある人々」(『季刊三千里』2号 三千里社 1975年 5月 p.p.120~135)

機」40)と言う報告を伝えた。41)

真継伸彦氏は、金芝河の公判を通して、韓国の民主勢力が最大の危機に陥っていると伝え、ここに、民主化勢力への世界からの支援の必要性を訴えながら、日本における民主勢力への関わり方の弱さを指摘した。さらに、利敵行為、共産主義者または容共ということに民主化勢力が弾圧されていることに対し、金芝河が「北の侵攻の危機を説くのは、国民の反共意識を利用した恫喝にすぎない。韓国人がたとえ東西世界の接線という最も危険な場所にいようが、平和的な手段で民主的政府と社会を実現し、これを北の同胞に示し平和で対等の統一交渉を行うことは可能である」と言う言葉を伝えた。42)

川久保公夫⁴³⁾氏は、学者の目から、ソウルの若者からの日本人に送られた書信を掲載、その若者を通し、当時の民主化闘争に対する日本人の理解を求めた。44)

吉松繁⁴⁵⁾氏は、市民運動の目から、民主化闘争を弾圧するための理由として、「スパイ在日政治犯」を作り上げている実状を訴え、彼らの釈放を求めた。さらに、彼らをスパイとして作り上げるためKCIAが行なっている日本での不当な活動と、朴政権と日本政府の癒着を批判した。46)

東海林勤⁴⁷⁾氏は、「キリスト教者の目から、8・15解放後、教会は、米軍および李承晩政権に優遇され、『ソ連＝無神論＝共産党』対『アメリカ＝有神論＝キリスト教』とい二元論的な考えにとらわれていた。この反省・自己批判から、独裁政権との闘いが始まっている」とし、従来、日本の教会の良心的な人々は、戦前・戦後の教会の誤りを反省するだけで、教会史をただ否定的にとらえて済ませる傾向があったが、韓国でのキリスト教者闘争を積極的に支援すべきであると、主張した。48)

以上のように、『季刊三千里』において、各界の日本人に韓国における民主化闘争全般の状況を語らせ、金芝河救命運動だけに終わらず民主化闘争への連帯と支援を日本人に訴えている。

40) 韓国対外責務は72年に32億ドルだったのが、75年には前年二倍の借入れを行い、同年度末には未支払いの負債は総額59億ドルに達した。76年にはこの経済危機が解決しないどころか今後数年にわたり年々約20億ドルという国際収支の赤字を続けるだろうと警告した。当時の韓国の経済力は、76年の輸出が62億ドル、輸入が85億ドル。(前田康博「冬の時代」(『季刊三千里』第5号 三千里社 1976年 2月 p.143)

41) 前田康博「冬の時代」(『季刊三千里』第5号 三千里社 1976年 2月 p.p.136-143)

42) 真継伸彦「ある韓国人のメッセージ」(『季刊三千里』第7号 三千里社 1976年 8月 p.p.130-133)

43) 大阪経済法科大学元学長、大阪市立大名名誉教授、西洋経済史

44) 川久保公夫「ソウルの若者たちから」(『季刊三千里』第8号 三千里社 1976年 11月 p.p.130-133)

45) 1954年から日本基督(キリスト)教団王子北教会の牧師。1971年以来、徐勝・俊植兄弟らの救援活動をつづけ、1976年在日韓国人「政治犯」を支援する会全国会議を結成、事務局長。1989年同会議代表となる。同年「民族の権利と解放のための国際同盟」日本支部を結成し、事務局長。

46) 吉松繁「在日韓国人“政治犯”の救援を」(『季刊三千里』第8号 三千里社 1976年11月 p.p.136-137)

47) 1932年生まれ。日本基督教団豊岡教会牧師、日本キリスト教協議会総幹事等歴任。70～80年代の約20年間「徐君兄弟を救う会」代表、韓国問題キリスト者緊急会議実行委員。1990年「高麗博物館をつくる会」代表。2001年から「高麗博物館」(NPO)初代理事長。

48) 東海林勤「韓国キリスト教者の闘いに学ぶ」(『季刊三千里』第22号 三千里社 1980年5月 p.p.87-95)

これら以外にも韓国現地からの報告として、「韓国キリスト教と民族の現実」(朴炯啓/白楽晴『季刊三千里』第15号)、「獄中記・国保152号」(任軒永『季刊三千里』3号)、K・I(匿名)⁴⁹⁾の報告(第7～17号、但し第11号は不掲載)が掲載された。そこには、民主化闘争で捕まった者たちの獄中生活、さらに生活苦に追われながらも何故闘わなければならないのかが書き綴られている。

さらに、『季刊三千里』は韓国の民主化闘争だけでなく、「朴政権の十五年」(金正洙『季刊三千里』第6号)、「<対談>体制と市民運動」(日高六郎/金達寿『季刊三千里』第6号)、「韓国民主化運動の理念」(鄭貞順『季刊三千里』第8号)と、在日に、韓国の民主化闘争を越え、韓国の独裁政権政治の根本理念を追求批判させた。日本人である猪狩章氏も、『季刊三千里』で、

韓国における抵抗運動が論じられるとき、よく「民主回復」という言葉が良くつかわれます。民主「回復」とは何であるのか。韓国という国に回復されるべき民主主義があったのかという質問が当然でるわけですが、この場合の「回復」とは、1973年10月17日の戒厳令、つまり朴正熙による第二クーデター以前の状態に戻れということに過ぎません。⁵⁰⁾

と言い、単なる現政権打倒ではなく、他国の例をあげ韓国における真の民主主義の構築についてまで述べている。

さらに、「日韓体制の再検討のために」(梶村秀樹『季刊三千里』第7号)、「朝鮮半島と有事立法」(山川暁夫『季刊三千里』第17号)、「継続している植民地主義」(曹貞姫『季刊三千里』第28号)、「日韓国交正常化の虚構」(前田康博『季刊三千里』第28号)などで、韓国における高度成長を従属資本主義の発展と規定し、独立後の日韓関係のあり方を問い、分断そして今日の状況を作り出した要因として日本の植民地政策を上げた⁵¹⁾。

また、アメリカとの関係を、「アメリカ核戦略と日韓軍事関係」(藤井治夫『季刊三千里』第4号)、「米韓合同演習とその背景」(藤井治夫『季刊三千里』第14号)、「米国の朝鮮政策」(F・ボールドウィン『季刊三千里』第14号)、「日韓米軍事体制の新段階」(藤井治夫『季刊三千里』第20号)、「朝鮮半島の軍拡構造」(山本剛士『季刊三千里』第26号)、「日米の対韓政策と分断」(前田康博『季刊三千里』第26号)、「米日韓軍事体制の新極面」(藤井治夫『季刊三千里』第28号)などで、今日の状況

49) これは、当時知識人に大きな影響を与えた月刊雑誌『世界』(岩波書店)に韓国民主化闘争の現地報告という形で連載された「KT生(匿名)から」の記事をまねたものである。これは、一人の個人の報告ではなく、韓国から送られてきたものを、日本語に訳し一人の報告書という形で編集されたものである。

50) 猪狩章「韓国労働運動の原点」(『季刊三千里』第14号 三千里社 1978年 5月 p.113)

51) 伊藤一彦他訳『朝鮮はどうなっているの』三一書房 1980年 7月 p.p.208～227

を作り出している要因として、アメリカの存在を批判した。このように、『季刊三千里』は、民主化を妨げる外的要因として米日の韓国政策をあげた。

さらに、「朝鮮統一問題とわれわれ」(武者小路公秀『季刊三千里』第6号)、統一のための私の提言」(千寛宇『季刊三千里』第18号)、「南北朝鮮統一と民主主義」(小栗敬太郎『季刊三千里』第23号)、「朝鮮統一の軌跡」(内海愛子『季刊三千里』第23号)、「南北対話—『七・四共同声明』以後」(丹藤佳紀『季刊三千里』第26号)などで、日本人が『季刊三千里』において、韓半島の統一問題まで言及するに至った。日本人が韓半島の統一問題にまで及ぶことは、一見内政干渉に思われるが、「訪韓市民連合」の団長に推挙された桑原武夫氏に、『季刊三千里』で、

われわれはいままで韓国について、その文化について、戦後その方向をみななかったのは我々の怠慢である。我々はいままで戦争の終りまで悪いことをしていたにも関わらず、それだけでなく、戦後もそのような方角を見ていなかったという責任。今度、その怠慢にわれわれは遅まきながら気がついて、ここにきました。⁵²⁾

と言わせているように、韓半島の分断は日本による植民地化から起因しているにも関わらず無関心でいたというより、韓半島の分断化の固定化に日本が役割果たしてきたという反省のもとに、その矛先は韓国政府ではなく、日本政府にひいては自分自身に向けられたものであった。ここに、韓国の民主化闘争を日本人に知らしめるに終わらず、日本人の責任をも追求をしたといえる。

即ち、韓国民主化闘争に連帯する意味を日本人を通して語らせることは、「『季刊三千里』の立場(1)」で述べた『季刊三千里』の目的「日本人に朝鮮を考えさせ、在日問題だけでなく韓半島統一をも自らの問題として捉えさせる」である。

4. 光州民主化抗争と金大中

朴正熙の暗殺後、一時期「ソウルの春(韓国の民主化)」が訪れたが、全斗煥の軍事クーデターによって、光州民主化抗争など民主化闘争への過酷な弾圧が始まると、すぐに『季刊三千里』は、「いま問われていること」(和田春樹『季刊三千里』第23号)、「光州虐殺に思う」(金石範『季刊三千里』第23号)、「流血の光州—新たな36年」(前田康博『季刊三千里』第23号)、「<詩>光州は告発する」(李哲『季刊三千

52) 「激動が生み出すもの」(『季刊三千里』創刊号 三千里社 1975年2月 p.14)

里』第23号)、「光州から一年」(伊藤成彦『季刊三千里』第26号)などにおいて、全斗煥政権を批判するとともに日本政府の責任をも追求し、韓国民主化闘争への連帯を訴えた。

また、金大中の存在は日本においても、韓国民主化闘争の象徴であったが、金大中を記事にすることはあまりにも政治的なため、『季刊三千里』では記事の記載を控えたのか、それまで「金大中事件六年の軌跡」(前田康博『季刊三千里』第19号)と、「金大中事件にみる“安全都市”東京」(堀田謹吾『季刊三千里』第20号)の、金大中拉致事件の解明に向けた二つの記事しか掲載されなかった。そこでは、西ドイツと日本政府の違いを明確にし、日本外交の主体性のなさを批判した。⁵³⁾さらに、

日本国民は金大中拉致事件を契機に、隣国、韓国、韓国の政治情勢に大きな関心を寄せるようになった。皮肉なことに、不透明な政治決着にかえて日本国民が強い疑惑をいだき、真相究明への期待を募らせている。そして政敵拉致という野蛮な行為を公然と実行する政権が隣国に存在することを、はっきりと認識するまでになっている。金大中が日本政府と国民を区別して考えているように、日本人の多くも韓国の民衆と政権に明確な一線を画してとらえようとしている。その意味で拉致事件未解決のこの6年間は、日本にとって貴重な時間となったといえるだろう。民意を反映しない政府を支援し続ける日本政府。それはひいては事件の解決を心から願う日本国民の意志を無視し続けることにつながる。日韓両国政府のなれ合いとも言うべき不快な対応こそ、日韓両国の友好と親善を根本から崩し、健全な相互理解を拒む要因となっていることを日韓両国民は十分に知っている。⁵⁴⁾

と、金大中拉致事件が韓日間の健全な相互理解を妨げていると訴え、ここに日本・日本人が何をなすべきか正確なメッセージが示しているが、金大中を韓国民主化闘争に直接つなげて述べたものではなかった。

しかし、光州民主化抗争の首謀者として金大中が軍法会議で死刑判決を受け、日本においても「金大中救命運動」が発足すると同時に、金大中は日本においても韓国民主化の象徴として台頭した。

そして、これに呼応するように、『季刊三千里』も「金大中事件一七年目の夏」(渋沢重和『季刊三千里』第24号)、「密室裁判一金大中死刑判決」(前田康博『季刊三千里』第24号)、「金大中を殺すな・1980年夏」(和田春樹『季刊三千里』第24号)、「金大中を殺すな・1980年冬」(和田春樹『季刊三千里』第25号)と、金大中の記事を民主化闘争と関連づけて連載した。

和田春樹氏は、「金大中を殺すな・1980年夏」で、

53) 堀田謹吾「金大中事件にみる“安全都市”東京」(『季刊三千里』第20号 三千里社 1979年 11月 p.143)

54) 前田康博「金大中事件六年の軌跡」(『季刊三千里』 第19号 三千里社 1979年 8月 p.153)

1980年8月に訪韓した金丸信元防衛庁長官が13日に全斗煥と会談した内容「1980年代に第三次大戦もありうるのではないか、こういふときこそ反共の立場で、日韓は手を握っていかなければならない」という点で二人は一致し、金丸氏は「医者が外科手術をして、終わったあと知らん顔しているわけにはいかないだろう。アジアの安全保障のため、今後ともしっかりやってほしい」と、全氏が大統領になるように激励した。⁵⁵⁾

と、日本の政府の態度を批判した。また、この時期は、日本から韓国への新たな借款⁵⁶⁾が約束され、日本国内においては「光州民主化抗争」を題材にした在日の人気ロック歌手白竜の「光州シティ」が、レコード製作基準委員会の自粛要望(実質的には日本政府の圧力下で行われた)でレコード化が禁じられるなど、些細なことまで日本政府が全斗煥政権を支援した。

金大中を何故救わなければならないのかを、『季刊三千里』において和田春樹氏が、

日韓連帯委員会と韓国問題キリスト者緊急会議は、短いコメントを出した。「全てが急テンポで進展して行くように見え、われわれはそこにあらためて金大中に対するまぎれもない戒厳軍政府の殺意を感じている。軍法会議に公正な裁判を期待するほど愚かなことはない。弁護士を選任せよといひながら、弁護士を逮捕している現政権である。軍法会議は虐殺の儀式にすぎないであろう。われわれはあらためて事態が極めて重大であることを日本国民に訴える。金大中を殺すな、の声をさらに強めることしか道はない。金大中が殺されるなら、韓国の民主化はなく、韓国の安定もない。私たちの民主主義もあやくなり、私たちの暮しの安定も失われるであろう。⁵⁷⁾

と、「金大中」だから助けろと言うのではない、金芝河と同じように韓国民主化の象徴としての「金大中」であり、韓国民主化は日本の民主化につながるものであると、具体的に述べている。

さらに、和田春樹氏は「金大中殺すな・1980年冬」を、1980年11月3日午前11時に戒厳高等軍法会議の第2審の判決で金大中に死刑の判決が言い渡され、大法院での刑確定の手續きだけが残り、翌日にも処刑があるという緊迫した状況下で書き始めた。それは、11月3日から毎日の日記のように、韓国での状況そして日本での救命運動の展開を刻々と綴っている。その一部を上げると次の通りである。⁵⁸⁾

55) 和田春樹「金大中を殺すな・1980年夏」(『季刊三千里』第24号 三千里社 1980年 11月 p.156)

56) 死一等を減じたとかで、二度までも奇妙きつな決着を政治的に弄した当事者の国、日本が、褒賞金なみの199億円という借款をそえてまで賛意を表明した金大中「無刑期」の処理も、結局は全斗煥軍閥政治が暗黒の強権であることにはかわりはない。内外にとりつくろ程度の中からくりて時間を稼ぎ、強権体制維持に不安定要素の最なる要因である「金大中」を生き骸と化し去ろうとしているのである。はなから“殺す”理由などなかったのだ。

57) 和田春樹「金大中を殺すな・1980年夏」『季刊三千里』第24号 三千里社 1980年 11月 p.154

11月4日：……許文道大統領広報担当秘書官より、金大中の死刑執行を求める大衆運動を盛り上げるように指示があった。……衆議院第二議員会館で午後1時から「金大中救出日本連絡会議」第三回総会があった。……飛鳥田一雄⁵⁹⁾・田英夫⁶⁰⁾・宇都宮徳馬⁶¹⁾氏らの他に、河野洋平⁶²⁾氏が発言した。鈴木首相は価値観を共有する国々との友好を言っているが、金大中を処刑することになると、韓国はそう言う国だといえるのだろうか。……

11月13日：……日比谷野外音楽堂での金大中救出日本連絡会議主催、国民大会に行く。……6千人が集まった。……国連に出す百万人署名を持ってアメリカに行ってきた佐々木秀典⁶³⁾氏も発言した。……

11月14日：……四谷イグナチオ教会地下ホールでの「金大中さんら韓国政治犯の釈放を求める祈祷会」に出る。……カトリック正義と平和協議会が記者用に出した文章を読んだ。……全斗煥大統領が金大中について提示した三つの選択肢(国外追放、無期懲役への減刑、死刑執行)のうち死刑執行を選んだ、と書かれていた。……

11月20日：……須之部大使が鈴木首相に情勢を報告し、レーガンの勝利以後、全政権内部で強硬意見が強まり、このさい禍根を断つということに傾いている。……

11月24日：……ワシントンの「金大中らの釈放を求めるアメリカ緊急行動」のハービー事務局長と話して上で、日本キリスト協議会とカトリック正義の平和協議会の主催で会議を開くとの意志を表明して、本決まりとなった。……西ドイツのシュミット首相は、施政方針演説の中で金大中の釈放を要求した。……

58) 和田春樹「金大中殺すな・1980年冬」『季刊三千里』第25号 三千里社 1981年 2月 p.151～161

59) 衆議院議員(当選6回)・横浜市長・日本社会党委員長を歴任した。

60) 1947年、東京大学経済学部卒業。共同通信社に入社し社会部、政治部記者(東京裁判等の取材にあたる)、1970年同社を退職後、1971年6月、日本社会党から第9回参院選の全国区に立候補して192万票を獲得しトップ当選した。その後、社会党を除名された。西欧型の社会民主主義路線を掲げる。

61) 参議院議員(2期)、衆議院議員(10期)、日中友好協会会長・名誉会長、日本北アフリカ協会会長を務めた。父は陸軍大将、朝鮮軍司令官を務めた宇都宮太郎。1976年、金大中事件への日本政府の対応に抗議し、自民党を離党。さらに衆議院議員も辞職した。その後、無所属で衆議院議員に復帰。

62) 衆議院議員(14期)、衆議院議長(第71・72代)、副総理(村山内閣・村山改造内閣)、外務大臣(第122・127・128・129・130代)、内閣官房長官(第55代)、科学技術庁長官(第39代)、自由民主党総裁(第16代)、新自由クラブ代表(第1・3代)を歴任。1993年、宮沢喜一改造内閣の官房長官として、「従軍慰安婦問題」に関する日本政府の調査結果を報告した「慰安婦関係調査結果発表に関する河野内閣官房長官談話」(いわゆる「河野談話」)を発表した。

63) 日本の政治家、弁護士。元衆議院議員(当選5回)。社会党から民主党議員へ。父・佐々木秀世は自民党・宏池会所属の衆議院議員であり、第1次田中角栄内閣の運輸大臣を務めた。

11月26日：……韓国の『朝鮮日報』25日付け朝刊が21日の鈴木(首相)・崔(大使)会談の内容を暴露する記事を一面トップにのせ、「日本、韓国に外交脅迫—金大中裁判に露骨な内政干渉」という大見出しを付したことはじまり、夕刊各紙も一斉にこれに同調して韓国で「反日の動きが強まっている」と各紙が報道している。いよいよ(韓国において)金大中処刑のためのムードづくりがはじまった。……

11月27日：……午後1時より、日比谷野外音楽堂で、金大中救出日本連絡会議主催の全国総決起大会にでる。……7千人の参加者は風船を空に放した。風船にぶら下げたたんぎくには、「金大中を殺させるな 日本連絡会議」と書かれていた。……西ドイツの連邦会議は、首相演説を受けて、金大中救出のための決議を採択した。……

11月29日：……鈴木首相に飛鳥田一雄社会党委員長が会談したとき、槇枝総評議長、富塚事務局長が同席の中、裁判が「政治決着」⁶⁴⁾時の約束に違反したと述べた。

12月1日：……社会党大会は「金大中を殺させないための緊急決議」を採択した。総評も、死刑判決が出れば、10分間の抗議ストを行い、全港湾を中心に韓国船荷揚げ拒否、韓国向け物資輸送ボイコットを行うことを正式に発表した。同時に、槇枝総評議長名で、韓国労組あてに、自分達の抗議行動は「韓国労働者との敵対を目的としたものでは断じてない」とのメッセージを送った。……

12月5日：……オーストラリア労組評議会が金大中に死刑が確定すれば国際自由労連に韓国商品ボイコットを提案するといってきた。……

など、金大中の死刑が迫る緊迫した状況で、海外と連携して「金大中救命運動」が日本でも激しく巻き起こり、東京・大阪など大都市を中心に連日連夜のように街頭演説・署名運動・ハンガーストライキ・韓日政府への抗議デモが行なわれ、それは市民運動家だけでなく、日本の労働組合・著名な政治家をそれも与党自民党の重鎮であった宇都宮徳馬や河野洋平までも巻き込んだ大きなうねりとなり、「金大中を殺すな!」というシュプレヒコールが日本全国に鳴り響き、毎日のようにマスコミで報じられた。

さらに、この「金大中救命運動」は、金大中に対するものだけにおわらず、韓国政治犯全員の救命にむけられた。⁶⁵⁾

64) 日本での金大中の行動は裁かないというのが、韓日間で結ばれた「金大中拉致事件」の「政治決着」である。しかし、金大中の死刑判決文には、日本での行動も含まれていた。

65) 和田春樹「金大中殺すな・1980年冬」『季刊三千里』第25号 三千里社 1981年 2月 p.164~165

12月12日：……金大中については国民的関心の高まりがみられるが、在日韓国人で、スパイにでっちあげられ、死刑判決が確定した五人の人々には、はるかに関心が低い。そういう中で、ねばり強く活動を続けている各教授会の人々の努力は敬服に値する。姜宇奎氏の場合、江口牧師を中心とする救う会と江戸川区労協の努力には本当に頭がさがる思いである。私は、金大中さんの場合と同じく在日韓国人の運動も北朝鮮と結び付けて死刑判決をだしているもので、国土の分裂状況と在日韓国・朝鮮人の存在とに起因するスパイ事件のフレームアップの性質が同じだと指摘した。……

12月17日：……私学会館で、午後四時半より、隅谷三喜男東京女子大学学長と磯村英一東洋大学学長とが記者会見し、全国七二の大学学長の声明を発表した。声明は、10月31日になされた12人の学長・元学長の声明を発展させたもので、金大中に対する極刑に反対し、政府の努力を求めるとともに、戦前の日本の大学の歴史にかんがみ、韓国の大学人の受難に憂慮を表明し、李文永高麗大学教授の釈放を求めている。関西でも同時発表がなされた。……

12月18日：……研究所の委員会と最後の教授会の昼休みに、陳斗鉉氏を救う会などの呼び掛けて時計台(東京大学)の前で開かれた集会で挨拶する。陳斗鉉氏も死刑が確定している。……

このように、金大中救命運動が、他の政治犯救命運動にひろがっていることが分かる。また、何故日本での「金大中救出」運動か。『季刊三千里』において、和田春樹は、66)

金大中が救われたら、運動はどうなるかという質問に対して、私は金大中が救われれば、運動をやめる人も多いただろうが、この問題を契機に目を開かれた人は、日本の対韓政策をあらためさせる運動を続けるだろう。

私は、「日本政府に対する国民の主張」十項目を読み上げた。「全過程をふりかえってみれば、金大中を殺そうとしている企てを日本政府が助けているといわざるをえない。韓国を自分の勢力圏として利用しようという基本路線と金大中拉致事件の『政治決着』に現れた歪みが、不正常的な日韓関係を作り出し、金大中の死を導こうとしているのである。残されたわずかな時間の中で、日本政府がなさねばならないし、なしうるのは次のことである。民主主義という道理、国家間のあるべき関係についての原理的な立場に立ち返って発言することである。

残された時間は余りにも短い。金大中の担う十字架の意味をもっと広く説明しよう。金大中の運命が私たちの運命と一つに結ばれたものであることを訴えよう。……速達でも電報でも、電話でもいい、私たちの政府に、金大中が殺されたら、あなた方にも責任があると迫っていこう。私たちの貧しい力の全てを振り絞って闘っていく。金大中さんを殺すな！

夕方、六本木のテレビ朝日について筑紫哲也氏の「こちらデスク」に、元法相田中伊三次、イーデス・ハンソン両氏とともに出演する。私は、(元法相田中伊三次が)内政干渉はいかんといわれるが、日本は過去も現在もずっと韓国に内政干渉してきたのだ、「金大中を殺すな」という声は、これまでの「内政干渉」を反省することにつながるのだと主張した。

これら一連の『季刊三千里』の記事は、単に金大中を救えと言っているだけでなく、歴史的問題を踏まえて、韓日間の正しい連帯を述べるものである。そこには、日本人の反省が深く含まれていることを見逃してはならない。

5. 終りに

以上見てきたように、『季刊三千里』は、前面に出て闘うというのではなく、日本人に韓国民主化闘争を語らせることによって、それが韓国人の問題でなく日本人自身の問題であることを認識させ、韓国民主化闘争に対する日本人の連帯を誘発した。この時、『季刊三千里』がどれだけの役割を果たしたかは、統計があるわけでもないのもそれは未知数であるが、まだ日本のマスコミに韓国の民主化闘争があまり報道されていなかった状況下で、当時日本を代表する多くの市民運動家たちに『季刊三千里』の誌面を提供し、日本人に韓国の民主化闘争への支援を訴えさせたことをみて、『季刊三千里』が果たした役割は大きかったと判断できるだろう。

『季刊三千里』が韓国民主化を語らせた日本人は、それぞれの注で示したように、政党・組織に属しない日本人を代表する知識人たちで、反共主義者ではないがその思想は非共産主義であることは確かである。ここに『季刊三千里』の意図が伺い知ることができる。つまり、韓国の民主化闘争が、共産主義革命でなく、また北との連帯でないことを示し、民主化闘争の本質がどこまでも民主主義に根差したものであることを明らかにした。

そして、日本人に語らせたのは、韓国民主化闘争を単に韓国の問題として終わらせるのではなく、日本人の問題として、日本人大衆に知らせ考えさせることを狙ったためである。さらに、何故日本人大衆に知らせる必要があったのか。日本の世論を通して、独裁政権にてこ入れする日本政府に、韓国政策を変更させる目的があったからである。また、日本人

に韓国を考えさせることによって、韓国民衆と日本民衆との真の連帯を図ったといえる。もし当時、日本において、韓国民主化闘争との連帯が行なわれていなかったら、即ち政府間レベルによる独裁政権に対する支援だけで終わっていたなら、民主化を手にした現在の韓国民衆と日本人との連帯は可能であろうか。

光州民主化闘争を整理する記事「全斗煥政権の一年」(前田康博『季刊三千里』第30号)以後、『季刊三千里』において、韓国民主化闘争に関する記事が見られなくなった。これは、韓国において民主化が達成され、記事にする価値がなくなったというのではない。当時、「朴大統領暗殺」「光州民主化抗争」「金大中死刑判決」とあまりにも衝撃的な事件が続き、日本において毎日のようにマスコミに報じられるようになった。報道誌でなく三ヶ月に一度刊行されていた季刊誌『季刊三千里』では、次から次へと入ってくるニュースに既に対応しきれなくなっていた。そして、『季刊三千里』が語るまでもなく、韓国民主化闘争は既に日本人の一大関心事となっていた。このため、『季刊三千里』が誌面を提供するまでもなく、多くの雑誌に韓国民主化の記事が掲載されるようになった。

ここに、『季刊三千里』の韓国民主化闘争を日本人に知らしめるという役割は終わったと言える。その後、『季刊三千里』の本来の目的であった「日本人に韓半島を考えさせる在日問題も自分達の問題として考えさせる」ために、日本人に韓半島に対する誤った認識を正すことを目的とし、韓半島の歴史・民族、韓日関係史、在日(の歴史、思想、現状)の記事を中心に掲載するようになった。

本論において最後に問題提起しなければならないのは、何故『季刊三千里』は韓国の民主化闘争に熱意を込めたのか。この答えは、『季刊三千里』の創刊の言葉の中にある「雑誌『季刊三千里』には、朝鮮民族の念願である統一の基本方向をしめした1972年の『七・四共同声明』にのっとった『統一された朝鮮』を実現するための切実な願いが込められている」67)に求めることができるであろう。解放後の祖国の分断は、在日の祖国離れを促すとともに在日のアイデンティティーの亡失を引き起こし、彼らの独立という歴史をも否定するものでもあった。このように、祖国統一は在日にとっても切実な問題であった。金芝河が「良心宣言」のなかで「私が夢見ている革命は、自由、民主、自主、平和を基礎とする統一祖国の建設を目指すものである」といったように。統一への道が韓国の民主化であった。統一のための韓国民主化である。これに対しては、後日論じることにする。

この論文は、半分は韓国人にとって常識的なものであって、他の半分は韓国に関心がある日本人にとって常識的なものであろう。それゆえ、この論文の価値を見いだしたい。そして、当時組織に属さなく在日を代弁した『季刊三千里』が30年経った現在においても整理されていない点を真摯に受けとめ、何故、今、『季刊三千里』なのかを理解していただきたい。

67) 編集委員「創刊の言葉」『季刊三千里』 創刊号 三千里社 1975年2月 p.11

【参考文献】

- 愛知新聞 在日取材班『在日一日韓朝の狭間に生きる』 愛知新聞社 2004年
小熊英二/姜尚中『在日一世の記憶』 集英社 2009年
宮田浩人『65万人—在日朝鮮人—』 すすさわ書店 1977年
金石範『「在日」の思想』 筑摩書房 1981年
金賛汀『韓国併合と「在日」』 新潮社 2010年
金時鐘『「在日」のはざままで』 平凡社 2006年(2001年)
金昌宣『在日朝鮮人の人権と植民地主義』 社会評論社 2008年
朴斗鎮『朝鮮総連—その虚像と実像』 中央公論社 2008年
韓光熙『わが朝鮮総連の罪と罰』 文芸春秋 2005年
『季刊三千里』 三千里社 創刊号, 第2号, 第3号, 第4号, 第5号, 第6号, 第7号, 第8号,
第9号, 第10号, 第14号, 第17号, 第18号, 第19号, 第20号, 第22号, 第23号, 第24号, 第25号, 第
26号, 第28号, 第30号

要 旨

南北の独裁政権に反する立場から、日本のマスコミに韓国の民主化闘争があまり報道されていなかった時、『季刊三千里』は韓国民主化闘争との連帯を語り、韓国民主化闘争を日本人に知らせ、語らせ、考えさせた。この韓国民主化闘争への功績は高く評価されるべきである。

「金芝河を助ける会」「金大中救出日本連絡会議」を単に金芝河・金大中個人の問題としてではなく、韓国民主化運動全般の問題として捉え、日本人をして韓国民主化運動との連帯の重要性必要性を訴えさせ、さらに韓国民主化闘争の意義そしてそれが目指す意味を日本人に知らしめた。

さらに、韓国民主化運動を日本人自身の問題として捉えさせ、日本の責任をも追求した。韓半島の分断は日本による植民地化から起因しているにも関わらず、無関心でいたというより、韓半島の分断化の固定化に日本が役割果たしてきたという反省から来るもので、その矛先は韓国政府ではなく、日本政府にひいては自分自身に向けられたものであることを説いた。これは、韓国民衆と日本民衆との真の親善連帯を目指すものでもあった。

キーワード：『季刊三千里』、金大中、金芝河、韓国民主化闘争、日本の責任

투 고 : 2012. 5. 31

1차 심사 : 2012. 6. 16

2차 심사 : 2012. 7. 7